

「「またいつか、雪の降  
る夜に」」

青い灰

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

直死の魔眼を手にした主人公の話。

# 目次

プロローグ	1
焔の少女	11



## プロローグ

「あ——」

掠れた声が、口から漏れた。

目の前に広がる惨状に、ただ釘付けになって。

家族が千切られ、擦り潰され、溶かされ、

グチャグチャの肉片になっている。

「まだ生き残りがいたか？」

まあ良い。腹の足しにはなるだろう」

そして、喰われた。

## 2 プロローグ

声が、聞こえて。

——  
あら、  
珍しいわね。

俺は意識を取り戻す。

其処は何処でもない場所。

ただ、白い光に包まれている空間。

其処から先は無く、無論、前も在りはしない。

『ごんには。

どうやって此処に来たの？興味深いわ』

その問いに、臆気な意識のまま俺は答える。

分からない、と。

『……………そう。貴方にも分からないのね。

1つ言うなら、貴方。生きてはいないわ。

生きているなら此処に来ることは出来ないから』

眼を開ける。

其処に居たのは——白い。

×××

いや、これは……認識が、出来ない？

すると、××は眼を細め、

そして、美しく微笑んだ。

何か、可笑しかつただろうか？

『……………ふふ、ごめんなさい。』

この場所について理解出来たの。

貴方が迷い込んだと思っていたけど、

どうやら迷い込んだのは私みたいね』

此処が何処なのか、分かるのか？

『ええ。此処は貴方の夢。』

その奥底……深層心理、とでも言うべき場所ね。

本来は貴方は認識出来ない場所』

なら、俺や君はどうして此処に？



『……………まるで尋問ね』

……………ごめん。

何も分からないから聞くしなくて。

『ふふっ、ごめんなさい。少し揶揄っただけよ。

貴方が此処にいる理由は少し分からないけれど、  
私は何処にでもいて、何処にもいないから』

……………？

ぼんやりだけど、分かった……と思う。

認識出来ないのもそのせいだったりするの？

『ええ、そうね。

あと貴方が此処にいる理由、推測は出来るわ。

——— 貴方、死んだのね？』

ああ、そうだった。

俺は確かに、喰い殺されたんだ。

あの化物に。

『へえ、面白いわね』

……………不謹慎。

『ごめんなさいね、だけど、これは……………』

その時だった。

真っ白な空間に割れた硝子のような亀裂が走る。

空間が軋み、崩れ落ち始める。  
同時に意識が薄れ始めた。

『——ああ、夢が覚めるのね』

夢が………死んだのに、どう目覚める………？

『安心して。少し弄ったの。』

短い間だったけど、楽しかったわ』

待って、ほしい。

また、会えるのか？

『——そうね、またいつか』

世界が崩壊する。

『雪の降る夜に』

「雪の……………降る夜に……………」

俺は、血の海にぼんやりと佇んでいた。

満月が空に浮かんでいる。

手に重みを感じて視線を下に向けると、

そこには白鞘に納められた長刀があった。

抜いてみるとその刀身は、まるで雪のようだった。

そして視線を落とし、

俺は肉塊となった家族を持ち上げる。

「埋めよう」

静かに、誰もいなくなった小さな集落を歩く。

その途中、空を飛ぶ鳥を見上げる。

——線が、見えた。

## 焰の少女 1

「あ、ぐ」

シチューに浸したパンに噛み付く。

湯気を立てるほど熱を帯びたそれは

口内に入ると同時にシチューに入れていた

チーズの甘味を広がらせ、その熱で身体を暖める。

台所の鍋からの湯気が木造の家を温かくしているが  
長春という名前に反して地獄のように寒い地域では  
あまり意味がない。

ふと窓の外に眼を向けると、まだ雪が降っていた。

もう1ヶ月近く降り続けている。

「……………」

その光景を見ながら1年前の血と死体の海、  
そして雪のような少女を思い出す。

惨劇は未だ鮮明だが、

対してあの少女はどこかぼんやりとしていて、

まるで霧がかかったかのように思い出せない。

……しかし、今年はまた一段と雪が早い。

暦を重ねるごとに秋という季節が短くなっている。

日本はまだ8月だった筈だ。

「……………いかん、積もる前に雪掻きをしないと」

パンを口に詰め込み、シチューを飲み干す。

木の皿をシンクに入れて水道を捻って水に浸け、

スコップを取りに部屋へ行こうとした時だ。

部屋にノックの音が響く。

そして、雪の上に何かが落ちたような音。



「？」

まさかこの雪の中、客人とは。

だがこんな山奥に一体なんの用だろうか。

遭難か、もしくは——

とにかく、入口へと向かって扉を開ける。

「……………あ？」

燃えるような赤が視界の下で眼を引き、

視線は雪の上へと向かう。

そこに倒れていたのは、

眼を引いた赤髪の小さな少女だった。

「……………」

屈んで手を少女の口元へと当てる。

息は荒く、意識はないが先程までであったのだろう。

まだ頬は暖かい。

そして……問題が2つ。

1つ目だが、少女は全身を黒いマントで覆っている。

その脇腹の所が破れ、そこからの流血がある。

そして……2つ目。

彼女とマントを掴んで家の中へと投げ込む。

少々手荒いが、こればかりは仕方ない。

「厄介な土産を持ってきてくれたもんだな」

血の臭いに惹かれたか、

もしくはあの少女を餌として定めたか。

2匹の獣が、雪原の先……森の奥から姿を現す。

片方は2〜3mはある黒い獅子、

片方は獅子と同じく大型の黒い狼だ。

白鞘から刀を抜き、右目の眼帯を外す。

随分と懐かしい感覚だ。

獣に合わせて『線』が視えてくる。

「——ッ!!」

「ああ、来るのなら……殺すぞ」

刀を垂らし、疾走してくる狼を捉える。

黒狼は蛇行するように走り、

更に雪を巻き上げて攪乱しながら迫ってくる。

この獣たちが蠢く地で

生き残ることに特化した獣たちは

厄介なことにかんりの知能を得てしまう。

……だが、人の力を

理解しているワケではない。

——例えば、魔術だとか、この眼だとか。

ポケットの中から札を取り出し、

それを雪の煙幕へと投擲、右手の刀でそれを両断。

「風よ、吹き荒れろ」

瞬間、両断された札は竜巻となつて

降り積もる雪ごと狼を大きく空へと打ち上げる。

そして2枚目の札を足元に叩きつけ、

竜巻に乗って飛び上がる。

「ふ——ッ！」

「!？」

線をなぞるように、黒狼を斬る。

何の抵抗もなく、それはプツン、と

機械の電源を落とすように絶命した。

雪は霧散し、黒狼の死体と共に雪の上に着地する。

その様子を傍観するだけだった獅子へと

眼を向けるが、黒獅子はこちらへ背を向けて

森の奥へと消えていった。

野性の獣故に、生命の危機には敏感なのだろう。

「……ふ……う……」

息を吐き、眼帯を付け直す。

それと同時に視えていた線は

右目の視界と共に消えてなくなつた。

刀に付着した血を払い、鞘へと納める。

結局、刀を獣の血で汚し、札を2枚無駄にした。

無理に真つ向から戦えば怪我の危険もあるので

安全に殺すに越したことはないが。

とにかく、黒狼は食用にするとして……

家の中で死体が完成してしまっても困る。

魔獣と呼ばれる獣たちの血で

他の獣が寄ってくることはほとんどないので  
黒狼は放置し、家へと戻る。

扉を閉め、投げた少女を探す。

壁に背を向けて少女は蹲っており、  
その焦点の定まらない琥珀色の双眸が  
こちらを見ていた。